

基礎から学ぶ 英語学入門ガイド

A Reader-Friendly Invitation
to Understand English Linguistics

福田 稔 著

開文社出版

A Reader-Friendly Invitation to Understand English Linguistics

Copyright © 2022

by

Minoru Fukuda

All Rights Reserved.

No part of this book may be reproduced in any form without written permission from the
author and KAIBUNSHA Publishing Co., Ltd.

はじめに

本書は、はじめて英語学を学ぶ人のための入門書です。内容の大部分は、大学の授業（英語学概論という科目）で使ったハンドアウトをもとにしています。ただ、書籍化するにあたって、次の3点に留意しました。

まず、大学や短大で学ぶ英語学に最近生じた「変化」に対応することです。中学や高校の英語教員の免許を取得するためには、英語学の基礎を学ぶ必要があります。2019年（令和元年）4月に、文部科学省はその具体的内容を「外国語（英語）コアカリキュラムについて」で指定しました。それによると、英語学の全体目標として、「中学校及び高等学校における外国語科の授業に資する英語学的知見を身に付ける」があり、そのための学習内容は、「英語の音声の仕組み」、「英文法」、「英語の歴史の変遷、国際共通語としての英語」の分野から構成されています。そこで、本書の章立てを以下のように整えて、この3分野の基礎を漏れなく学べるようにしました。

第2章	英語の歴史	「英語の歴史の変遷、国際共通語としての英語」
第3章	英語の世界進出	「英語の歴史の変遷、国際共通語としての英語」
第4章	単語の形成法	「英文法」
第5章	単語の構成	「英文法」
第6章	発音の種類と仕組み	「英語の音声の仕組み」
第7章	発音の変化	「英語の音声の仕組み」
第8章	単語の意味	「英文法」
第9章	文の意味	「英文法」
第10章	文の成り立ち	「英文法」
第11章	文構造の分析	「英文法」

次に、読者の興味を惹く内容を取り入れたいと考えました。例えば、「日本における英語学研究や英語学習の始まり」は興味深いトピックですが、英語学の入門書で扱われることはあまりないようです。そこで、本書の第1章や第3章で取り上げることにしました。また、近年大きな関心が寄せられているコーパスと言語習得についても、それぞれ第12章と第13章で紹介しています。

最後に、読みやすくなるよう心がけました。私は「反転授業」という授業法を採用しているので、学生が授業前に教科書を読むことを必須の課題と位置付けています（さらに、授業の冒頭で小テストも実施しています）。そのためには、「内容が把握しやすい」ということが重要です。そこで、本書で扱う事項や用例を思い切って絞り込み、理解に役立てるために、英語の例だけでなく日本語の例も活用しました。大学や短大の学生だけでなく、知的好奇心が旺盛な高校生や社会人の方々にも十分理解して頂ける内容です。ただ、分かりやすさを優先したために、正確性を欠く表現になった箇所や、主観が色濃く出てしまった箇所があると思います。

なお、本書を授業用教科書として使用する際のシラバス案や、各章毎の小テストも作成して、指導者向けの教授用資料としてまとめてあります。

本書が完成に至るまで、多くの人たちに助けて頂きました。特に、高橋勝忠先生、西野雄登さん、宮村純夕さん、重藤大輝さんからは、さまざまな指摘やコメントを頂きました。また、開文社出版の丸小雅臣社長には、出版に至るまでさまざまな助言を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

「驚きは、知ることの始まりである」とは、ギリシャの哲学者プラトンの言葉です。驚きまでとはいかないかも知れませんが、本書が皆さんの知的な刺激となり、学びの一助になることを祈っています。

令和4年8月吉日

福田 稔

目 次

はじめに.....	iii
第1章 英語学の研究	
1.1 英語学と英文法.....	1
1.2 脳の支配力.....	3
1.3 科学的な研究.....	5
1.4 研究の歴史.....	7
1.4.1 言語研究への関心.....	7
1.4.2 ヨーロッパの言語研究.....	8
1.4.3 ヨーロッパとアメリカの構造言語学.....	10
1.4.4 伝統文法の新たな歩み.....	12
1.4.5 生成文法の誕生.....	14
1.4.6 日本における英語学研究の幕開け.....	15
第2章 英語の歴史	
2.1 英語は国際語.....	18
2.2 イギリスの地理.....	21
2.3 英語の始まりと時代区分.....	23
2.4 古英語の時代.....	26
2.5 中英語の時代.....	30
2.6 近代英語の時代.....	33

第3章 英語の世界進出

3.1	世界へ伝わった英語	35
3.2	アメリカ英語の成立	37
3.3	日本人と英語の出会い	41
3.4	アルファベットの工夫の歴史	43
3.5	大文字と小文字	45
3.6	現代英語の謎解き	47
3.6.1	timeが「テーマ」でなく「タイム」になる理由	47
3.6.2	不規則動詞go	48
3.6.3	語末がsの副詞	48
3.6.4	関係代名詞that	49

第4章 単語の形成法

4.1	単語を作る方法	51
4.2	略語	51
4.3	複合語	52
4.4	品詞転換	55
4.5	派生語	55
4.6	オノマトペ	58
4.7	エポニム	58
4.8	逆成語	59

第5章 単語の構成

5.1	単語を構成する要素	62
5.1.1	形態素	62
5.1.2	位置による分類	63

5.1.3	機能による分類	64
5.2	結びつきの相性	66
5.2.1	選択制限	66
5.2.2	接頭辞の例	68
5.2.3	接尾辞の例	69
5.3	右側主要部の規則	71
5.4	接尾辞と単語の歴史	73
第6章 発音の種類と仕組み		
6.1	発音を学ぶこと	78
6.2	音声学と音韻論	78
6.2.1	口から出る発音	79
6.2.2	頭の中の発音	81
6.2.3	辞書の発音記号	83
6.3	母音の発音	84
6.3.1	母音の種類	84
6.3.2	母音図	85
6.3.3	発音の仕方	87
6.4	子音の発音	89
6.4.1	子音の調音法	89
6.4.2	子音の調音点	91
6.4.3	子音の成分分析	92
第7章 発音の変化		
7.1	強勢アクセント	93
7.2	弱化	96

7.3 同化	99
7.3.1 単語内での同化	99
7.3.2 進行同化	100
7.3.3 逆行同化	102
7.4 機能語の弱化	103
7.5 連結と分離	105

第8章 単語の意味

8.1 「意味」の意味	108
8.1.1 多義性	108
8.1.2 成分分析と意味素性	109
8.2 名詞の意味素性	110
8.2.1 [±animate] による分析	111
8.2.2 [±concrete] による分析	113
8.3 動詞の意味素性	115
8.3.1 意味による動詞の分類	115
8.3.2 状態動詞と動態動詞	116
8.3.3 3種類の動態動詞	118
8.3.4 意味素性による分類	120
8.3.5 分ける根拠	121

第9章 文の意味

9.1 意味構造	123
9.2 モダリティ	124
9.3 法助動詞	126
9.4 日英語の応答表現	130

9.4.1	基本原則	130
9.4.2	英語の応答表現	130
9.4.3	日本語の応答表現	132
9.5	動詞と文の意味	134
9.5.1	述語と項	134
9.5.2	項構造と意味役割	136
第10章 文の構成		
10.1	文が作られる仕組み	138
10.2	意味は必要か	140
10.3	語彙項目の種類	143
10.4	句の種類	144
10.5	文の基本構造	145
第11章 文構造の分析		
11.1	句構造規則	150
11.2	名詞句の構造 (その1)	150
11.3	前置詞句の構造	152
11.4	名詞句の構造 (その2)	153
11.5	動詞句の構造	155
11.6	文の構造	157
11.7	創造性と構造依存性	160
11.8	構造と意味と発音の関係	162
第12章 コーパス言語学		
12.1	コーパスとは何か	165
12.2	研究の歴史	169

12.2.1	萌芽期	169
12.2.2	生成文法との違いと融合	170
12.3	コーパスからわかること	173
12.4	コーパスを活用した研究	175
12.4.1	Whomは使われなくなるのか	175
12.4.2	関係代名詞whichの独立用法	177
12.4.3	接頭辞と接尾辞の分析	179
第13章 言語習得		
13.1	母語と第二言語	180
13.2	母語習得	181
13.2.1	母語習得の過程	181
13.2.2	経験論の問題	183
13.2.3	普遍文法	184
13.3	第二言語習得	185
13.3.1	研究の歴史	185
13.3.2	第二言語習得の過程	187
13.3.3	第二言語習得の条件	188
13.3.4	効果的な学習法	190
13.4	認知科学の外国語学習論	191
13.4.1	スキーマ	191
13.4.2	無意識の知識の深め方	193
13.4.3	学習の優先順位	193
参考文献		195

第1章 英語学の研究

1.1 英語学と英文法

英語について分析研究し、その実態や背後にある仕組みを明らかにしようとする学問分野が**英語学**（English linguistics）です。これと似た用語に**英文法**（English grammar）や**言語学**（linguistics）がありますが、これらの相違点と共通点は何でしょうか。

英語の母語話者は無意識のうちに何らかの規則に従って英語を使います¹。これを規則の体系（system of rules）としてまとめたものが英文法です。規則の体系とは、規則がバラバラにあるのではなく、それぞれが関係して全体としてまとまっている、という意味です²。

見方を変えれば、英文法とは、英語の母語話者の脳にあって、英語を理解したり話したりすることを可能にしてくれる言葉の仕組みであるとも言えます。

これに対して、英語学は英文法を研究対象とした学問分野です。例えば、日本語の「専攻」は「ある学問分野を専門に研究すること」を意味します。そのため、例えば、「大学で英語学を専攻する」と言っても、「大学で英文法を専攻する」と言うことはありません。これは、英語学は学問分野であり、英文法はその研究対象であるという違いによります。

また、言語学という用語もあります。英語学と同じく、言語学も学問分野の1つです。しかし、言語学は英語に限らず、様々な**人間言語**（hu-

1 「使う」には、構文だけでなく、単語を使ったり、発音したりと英語の様々な側面が含まれることに注意してください。

2 水系（river system）が良い例です。大きな川（本流）に小さな川（支流）が繋がり、全体としてまとまりを成しています。

man language) の文法を研究します³。よって、研究対象となる言語は英語学より言語学の方が広範囲に及びます。英語学は言語学に含まれると見なすこともできるので、英語学と言語学の専門用語は共通しています。

極端な言い方をすれば、英語に関わるすべてが研究対象となります。しかし、実際には、英語のどのような側面を分析し、どのような方法によって説明するかという観点から、複数の分野に分かれます。例えば、英語そのものの性質を研究する基礎研究の分野として、少なくとも(1)の4つがあります⁴。また、これを基礎とした(2)の分野もあります。

- (1) a. 発音に関する研究分野：音声学 (Phonetics) と音韻論 (Phonology)
- b. 単語に関する研究分野：形態論 (Morphology)
- c. 構文に関する研究分野：統語論 (Syntax)
- d. 単語や文の意味に関する研究分野：意味論 (Semantics)
- (2) a. 言語使用や談話を研究する語用論 (Pragmatics)
- b. 社会などの共同体での言語実態を研究する社会言語学 (Sociolinguistics)
- c. コーパス (corpus) の開発や活用を通じた研究を行うコーパス言語学 (Corpus Linguistics)
- d. 心 (つまり、脳) の中での言語の発達を研究する心理言語学 (Psycholinguistics)
- e. 母語と異なる言語の習得を研究する第二言語習得論 (Second Language Acquisition)

(1)の分野は**一般言語学** (general linguistics)、(2)の分野は**応用言語学** (applied linguistics) と分類することもあります。一般に、大学では、(1)に関する科目を履修してから、(2)に関する科目を履修するという順で

3 人間言語は**自然言語** (natural language) とも呼ばれます。

4 言語には音声言語だけでなく手話言語 (sign language) もあります。説明の便宜上、本書では音声言語としての英語を念頭に説明します。

す。

英語学の研究対象は現代英語とは限りません。例えば、過去のある時代の英語を研究することもあります。このように特定の時期の言語を研究することは、**共時言語学**（Synchronic Linguistics）と呼ばれます。もちろん、ある時代から別の時代への歴史的変化を研究することもあり、そのような研究は**通時言語学**（Diachronic Linguistics）と呼ばれます⁵。

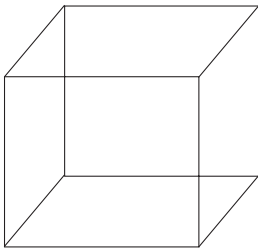
もともと英語学の研究は、「何かの役に立てる」という実用的な目的というより、事実を明らかにして、疑問を解明したいという純粋な真理探究が動機となって進められてきました。ただ、その過程で発見されたことの中には、例えば、英語教育に活用できるものが数多くあり、実際に活用が進められています。

1.2 脳の支配力

私たちは自らの意思で物事を知覚していると思っていますが、果たしてそうでしょうか。実は、脳の力は想像以上に強く、私たちの理性では抗うことができないことがあります。これは言語使用においても同じです。私たちは自らの意思で言語を使っているように思っていますが、脳に備わった文法に無意識のうちに従って言葉を使っているのです。

そこで、次の図形(1)を見ながら、脳の支配力を体験してみましょう。

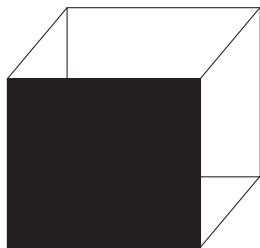
(1)



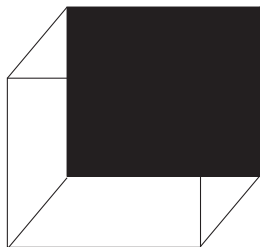
5 通時言語学は歴史言語学とも呼ばれます。1.4.3節のラングを参照のこと。

この図を見つめていると、ある面が浮かび上がって見えてきます。どの面でしょうか。(2)や(3)のように、黒色の面が浮き上がって見えてくると思います。いかがでしょうか。

(2)



(3)



最初に見たときは、いずれか一方しか見えなかった人でも、今2つの見方があることがわかったと思います。

さて、次に、(2)か(3)のいずれか一方の形を心の中で選んで下さい。そして、最初に見た図形(1)を10秒間、選んだ形だけを見るように努めてみて下さい。いかがでしょうか。

選んだ形だけを見ようとすると、なぜかもう一方の形が出てきて、1つだけを見るのを邪魔してしまうのではないのでしょうか。

つまり、図形(1)を初めて見たときには、2つの見方のうち、1つしか見えなかったのに、2つの見方がわかった途端、一方だけを見ることができなくなってしまうのです。

私たちは、物を見るときには自分の意思で見ていると思っています。でも、私たちの脳は、ひとたび2つの見方が可能であることがわかったと、

私たちの意思とは無関係に、2つの見方で見よう脳は強制するのです。その強制力は予想以上に強力で、私たちの意思や理性で変えることはほぼ不可能です。

人の言語能力も同じです。自由気ままに言葉を使っていると思っていても、実は、脳にある文法の規則に従いながら、それに違反することなく言葉を使っているのです。

1.3 科学的な研究

言語はある一定の規則に従って使われています。そのような規則はバラバラに存在するのではなく、体系を成しています。つまり、関連し合ってまとまりを成しています。その規則の体系が文法です。その言語が英語の場合に、その体系は英文法（English grammar）と呼ばれます。英語の事実を詳細に観察して、英文法の仕組みはどうなっているのかを明らかにしようとするのが英語学の目標の1つです。

英文法が明らかになると、それを用いて様々な言語事実を説明することができるようになります。しかし、最近の英語学の研究は、それだけに留まらず、その規則がなぜあるのかという理由までも明らかにしようとしています。

例えば、英語の名詞について考えてみましょう。名詞には**可算名詞**（Countable Noun）と**不可算名詞**（Uncountable Noun）があることは、皆さんご存知でしょう。この2種類の名詞の違いは何でしょうか。おそらく、(1)のように答える人が多いでしょう。

- (1) 可算名詞は数えられる名詞で、不可算名詞は数えられない名詞です。

ところが、これはただ単に、「可算名詞」と「不可算名詞」という漢字の意味の違いを説明しているだけです。2種類の名詞の根本的な違いを説明しているとは言えません。

皆さんの中には、英語の規則性に着目して、(2)のように答える人もいるでしょう。これは事実を捉えているという点で合格です。

- (2) 可算名詞は、不定冠詞aやanが付いたり（例えば、a catやan appleなど）、複数のsが付いたり（例えば、catsやapplesなど）する名詞で、不可算名詞はそのような要素が付かない名詞です。

それでは、どのような名詞に不定冠詞aやanが付いたり、複数のsが付いたりするのでしょうか。この問いに、「可算名詞です」と答えてしまうと、堂々巡りになってしまい、「可算名詞とは何か」、「可算名詞と不可算名詞の違いは何か」という本質を解き明かす説明にはなりません。

実は、英語の母語話者は、名詞が何を指すのかという意味がわかると、即座にその名詞が可算名詞か不可算名詞かということが判断できるので。また、同じ名詞でも意味に応じて、可算名詞として使われたり、不可算名詞として使われたりする場合があります。例えば、(鳥の種類である)「鶏」は、可算名詞a chickenやchickensですが、(食用の)「鶏肉、チキン」は、不可算名詞chickenとなります。

第8章で説明しますが、実は、名詞の意味を構成する根本的な要素があると考えられるのです。それによって可算名詞と不可算名詞の違いが生じたり、同じ名詞でも意味に応じて可算名詞になったり、不可算名詞になったりするのです。このように単純で、基本的なことを問い直しながら、奥底にある理由や原則を突き止めるのも英語学の目標の1つです。

ここで、具体的な研究の手順の例を紹介しましょう⁶。

- (3) 特定のトピックに関する資料を収集します⁷。文献や辞書で調べることもあれば、英語母語話者に尋ねることもあります。最近では、

6 英語学の研究者が実際にどのように研究をしているか知るために、中島（1995）や家入（2005, 2009）を参考にすると良いでしょう。

7 後に触れる生成文法（Generative Grammar）の研究では、実際に考察される正しい事例や母語話者が正しいと（つまり、文法的であると）判断する例だけでなく、不自然な事例や非文法的な事例も考察の対象としています。

コーパスを使うことも多くなりました。

- (4) 次に、考察対象の資料を考察し、資料に共通する一般的な特性や規則性や、例外的な事実を発見しながら、仮説 (hypothesis) を立てます。なお、資料に共通する一般的な特性を見つけることは**一般化** (generalization) と呼ばれ、より多くの事実を捉える仮説は一般性が高いと見なされます⁸。
- (5) 次に、導き出した仮説が正しいことを検証する必要があります。例えば、その仮説がどのような予測をするか考えて、他の事例にも当てはめ、その予測が正しいか確かめます。時には仮説の修正が必要となる場合もあります。これを繰り返し行うことで、その仮説の精度を高めます。
- (6) 正しいとされる仮説が判明したら、これを前提として新たな規則や法則を導くことが可能となります。

この手順は、小学校や中学校の理科で学んだ「観察→仮説→実験→検証」の手順と似ています。実は、言語研究は文系の分野であると思われていますが、研究方法は理系の分野と共通点があります。そのため、英語学や言語学は、**人文科学** (humanities) と呼ばれる科学分野に属します。

1.4 研究の歴史

1.4.1 言語研究への関心

言語の研究は実に歴史が古く、これまで世界各地で言語に関心が寄せられ、様々な考察や研究が行われてきました。

例えば、日本最古の歴史書『古事記』が太安万侶によって編纂され、元明天皇に献上されたのは712年（和銅5年）です。文字は全て漢字で書かれていました。それから約1000年後の江戸時代には、『古事記』は

⁸ 数学を例にすれば、最大公約数を見つけることに似ています。

既に古典でした。ですから、その解説のために江戸の国学者・本居宣長は、1764年（明和元年）から1798年（寛政10年）の34年を費やして注釈書『古事記伝』を執筆したのです。

このように、日本では西洋の学問が入ってくるはるか以前から、古典を読み解くための研究が行われていました。次に西洋での言語研究の歴史を概観してみましょう。

1.4.2 ヨーロッパの言語研究

西洋に目を移すと、言語研究は古代ギリシャから始まったと言われています。例えば、プラトン（Plato, 427/428 bce-347/348 bce）は言語の語源や獲得についての考察を行っていました。

そして、紀元前2世紀にはディオニュシオス・トラクス（Dionysius Thrax, 170bce-90bce）⁹が、最古のギリシャ語文法書『文法の技法』（英：*Art of Grammar*）を著しました。そこで、品詞という概念を体系的に整えました。例えば、古典ギリシャ語の単語を名詞、動詞、分詞、冠詞、代名詞、前置詞、副詞、接続詞の8つに区別したのですが、これが品詞分類の基礎となりました¹⁰。また、ラテン語文法にも影響を与えました。

例えば、4世紀中頃に古代ローマのアエリウス・ドナトゥス（Aelius Donatus）が著した『文法術』（*Ars grammatica*）は中世に至るまでラテン語文法書として広く使われたのですが、トラクスの品詞体系に基づいています。ラテン語の権威と相まって、中世までは「文法」と言えば「ラテン語文法」を指しました。しかし、ラテン語には冠詞がなかったので、古典ギリシャ語を土台にした品詞8分類には無理がありました。

このようにギリシャ語やラテン語の文法書を整えたことから誕生したのが**伝統文法**（Traditional Grammar）です¹¹。

さて、イギリス人によって英語で書かれた最初の英文法書はウィリア

9 年号のbceはbefore common era（紀元前）の略語、c.はラテン語のcirca（およそ）の略語です。

10 現代の学校文法での品詞分類の基礎にもなっています。

11 「伝統」という名称から「新しいものに劣った」と誤解しないように注意してください。渡部（2001:73-83）を参照のこと。

ム・ブロウカー (William Bullokar, c.1520-c.1590) による『簡約英文典』(*Bref Grammar for English*, 1586) です¹²。英語には冠詞があるので、トラスの品詞8分類はうまく適用できました。ところが、これはウィリアム・リリー (William Lily, c.1468-1522) が英語でラテン語を説明した文法書に基づくため、実質的にはラテン語文法を土台とした英文法書でした。

ラテン語を下地としたため、英文法には実態に合わない規則を強いる規範文法 (prescriptive grammar) の性格を帯びることもありました¹³。例えば、「to不定詞において、toと原型動詞の間に副詞を置いてはいけない」、「二重否定を用いてはいけない」、「前置詞で文を終えてはいけない」などの規則です¹⁴。

さて、15世紀から始まる大航海時代が始まると、ギリシャ語やラテン語に由来しない言語の存在も明らかになりました。特に、18世紀にイギリスがインドを植民地化したことで、インドの古代語であるサンスクリット語の存在がヨーロッパの言語学者に知られることとなります。驚くべきことに、紀元前5世紀から4世紀にインドの文法学者パーニニ (Pāṇini) はサンスクリット語の文法を分析し、まとめていたのです¹⁵。

1783年、そのインドにイギリスから来たのが、語学の才能に恵まれたウィリアム・ジョーンズ (William Jones, 1746-1794) でした。彼は東インド会社に雇われて、判事として赴任したのです。インドでサンスクリット語を学び始めると、直ぐにこの言語が西洋の古典語であるギリシャ語やラテン語に似ていることに気づきました。これら3言語は、(既に存在しない) 共通の古い言語に由来すると考えたのです。そして、1786年に開催されたカルカッタの学会での講演で自分の発見に触れまし

12 渡部 (2003: 70-90) を参照。また、渡部 (2020: 150-155) によると、3冊が現存しています。

13 1.4.4節で触れるように、伝統文法の流れを汲む文法書や研究が全て規範的という訳ではありません。

14 現代に至るまでの経緯については、鈴木 (2013, 2018) を参照のこと。

15 パーニニの文法論は、空海が著した『声字実相義』(しょうじじっそうぎ; 820年前後) に影響を与えたと言われています。

た¹⁶。この考察がヨーロッパに伝わり、地理的に離れた複数の言語であっても、歴史を遡ると、共通する**祖語**（proto-language）と呼ばれる言語に辿り着くという着想に至ります。

ジョーンズの考察をきっかけとして、祖語からどのように分かれて多種多様な言語が誕生したのかを解き明かそうとする**比較言語学**（Comparative Linguistics）の研究がヨーロッパで盛んになりました¹⁷。

1.4.3 ヨーロッパとアメリカの構造言語学

20世紀に入ると、新たな言語研究が誕生します。それが**構造言語学**（Structural Linguistics）です¹⁸。これは、ヨーロッパとアメリカという離れた地域で同時期に提唱された考え方を一括りにしているので、注意が必要です。

ヨーロッパの構造言語学における最重要人物は、スイスの言語学者**フェルディナン・ド・ソシュール**（Ferdinand de Saussure, 1857-1913）です¹⁹。言語は、基本要素が対立関係で定義されて構造を成す体系であると論じたことから、ソシュールの考えは構造言語学と呼ばれます²⁰。彼は現代に続く言語研究の礎（いしずえ）を築いたので、「近代言語学の祖」や「構造主義の父」とも呼ばれます²¹。

ソシュールは言葉の全体的な姿を**ランゲージ**（langage）と呼び、これは(1)のラングとパロールという二項対立の概念に分類されます。さ

16 サンスクリット語自体が祖語ではないという点に注意してください。ちなみに、彼の父親も同姓同名で、円周率を π で表した数学者でした。

17 特にドイツで盛んになりました。風間（1994: 34）、第2章の2.3節のグリムの法則を参照のこと。なお、比較言語学は、関係が深い複数言語（例えば、英語とドイツ語）の通時的観点での研究を指しますが、**対照言語学**（Contrastive Linguistics）は、関係が薄い複数言語（例えば、英語と日本語）の共時的観点での研究を指します。

18 **構造主義**（Structuralism）と呼ばれることもあります

19 ソシュールが亡くなった後、彼の教え子たちが講義内容をまとめて1916年に出版したのが、有名な『一般言語学講義』（*Cours de linguistique générale*）です。1928年にフランス語の原書から初めて外国語に翻訳されました。それは日本語訳で、翻訳したのは小林英夫（当時の京城帝国大学教授）です。ちなみに、ドイツ語訳が出版されたのは1931年、ロシア語訳は1933年。英語訳は1959年でした。

20 Trask and Mayblin（2000）を参照のこと。

21 立川・山田（1990: はじめに）を参照のこと。

らにラングには(2)の通時態と共時態の2つの側面があると論じています²²。

(1) ランガージュ

- a. ラング (langue) : ある言語を使う人々が共通に持っている、同じ文が同じ事柄を表すようにするための仕組み。
- b. パロール (parole) : ある言語でラングに属さない要素。例えば、個人が発音した音声などのように、その言語を使う人や場面で異なるような、共有されない要素。

(2) ラング

- a. 通時態 (diachronie) : ラングに属する要素の歴史的な変化。
- b. 共時態 (synchronie) : ある特定の時点でのラングの状態。

当時、ヨーロッパでは歴史的な言語変化の研究が盛んでしたが、ソシュールは通時的な歴史変化の解明には、特定時代の言語研究も必要だとして共時的言語研究の重要性を論じました。例えば、ある時代の英語から別の時代の英語への変化を研究するためには、それぞれの時代の英語の分析が必要不可欠になります。この考えは現在の言語研究で広く受け入れられています。

次に、アメリカ合衆国に目を向けてみましょう。20世紀に入る頃、母語話者が減ってゆくアメリカ先住民の言語の調査研究において、言語をありのままの姿を捉えようとする**記述的** (descriptive) な立場がとられました。その方法は英語や他の言語の構造分析の基盤にもなったので、構造言語学と呼ばれます。

その研究者の中で、「アメリカ言語学の父」と呼ばれたのがレオナード・ブルームフィールド (Leonard Bloomfield, 1887-1949) です。当時隆盛を極めた、観察できる行動のみを研究対象とした行動心理学 (behaviorism) の影響は言語学にも及びました。彼は、言語の科学研究は客観的に証明できる資料に頼るべきで、言語学は資料を集め、その分

22 町田 (2004) を参照のこと。

類 (taxonomy)²³と分析によって記述することであると論じました。言い換えると、観察できないものは言語研究の領域から除き、内面的な心理的過程を研究対象から外したのです。これが次に登場するノーム・チョムスキー (Noam Chomsky, 1928-) が提唱する**生成文法** (Generative Grammar) と大きく異なります。

1.4.4 伝統文法の新たな歩み

さて、伝統文法のことを忘れてはいけません。20世紀に入る頃から進展がありました。この頃には、以下のような言語の実態を重視する**記述文法** (descriptive grammar) の考え方を取り入れた英文法書がイギリスで著されました。

(3) イギリスの言語学者による英文法書：

- a. チャールズ・トールバット・アニアンズ (Charles Talbut Onions, 1873-1965) 『高等英文法—統語論』 (*An Advanced English Syntax*, 1904)
- b. ヘンリー・スウィート (Henry Sweet, 1845-1912) 『新英文法』 (*A New English Grammar*, 1892, 1898)

日本の学校英文法の5文型の分析を提案したのがアニアンズです²⁴。この分析法を当時の英語学者・細江逸記が、著書『英文法汎論』(1917)の「第2章 文の成立の形式」(pp.28-52)で援用し、日本で広めたと言われています。したがって、5文型を学校英文法で広く採用しているのは日本だけです。

また、スウィートは、1891年に書いた『新英文法』の序文 (Preface) の冒頭で、「科学的な英文法」(a scientific English grammar) と記していることから、科学的な観点からの英文法研究を意識していたことが分

23 第12章の12.2.2節と第13章の13.4.1節を参照のこと。

24 Onions (1904: 23) を参照のこと。宮腰 (2012) は、5文型がイギリスで広まらなかった理由について興味深い考察をしています。

かります。

また、イギリス以外でも著名な英文法書が出版されました。

- (4) デンマークの言語学者による英文法書：

オットー・イエスペルセン (Otto Jespersen, 1860–1943) 『史的原理に基づく現代英文法』 (*A Modern English Grammar on Historical Principles*, 1909–1949)

- (5) アメリカの言語学者による英文法書：

ジョージ・カーム (George Oliver Curme, 1860–1948) 『統語論』 (*Syntax*, 1931)

これらの流れはさらに発展して、近年では理論研究やコーパス調査も取り入れた次の文法書が出版されています。多くの大学図書館に所蔵しており、現代英語の研究や、卒業論文や学術論文の作成において頻繁に活用されています。

- (6) a. クワーク、グリーンボーム、リーチ、スヴァルトヴィック
(Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik) 『総合英文法』 (*A Comprehensive Grammar of the English Language* (ComGEL), 1985)²⁵
b. バイバー、ヨハンソン、リーチ、コンラッド、フィネガン
(Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan) 『ロングマン口語文語英文法』 (*Longman Grammar of Spoken and Written English* (LGSWE), 1999)
c. ハドルストン、プラム (Rodney Huddleston and Geoffrey K. Pullum) 『ケンブリッジ英文法』 (*The Cambridge Grammar of the English Language* (CamGEL), 2002)

25 イエスペルセンの『史的原理に基づく現代英文法』以来の大著とされています。

1.4.5 生成文法の誕生

言語研究を科学と明確に位置付けたのが、ノーム・チョムスキーが提唱している**生成文法**です。もともとチョムスキーは構造言語学を学んでいたのですが、その問題点と解決法に気づき²⁶、言語研究に（コペルニクスの革命と評せられる）大方向転換をもたらしたのです。例えば、徹底した客観主義のアメリカの構造言語学と異なり、直接観察できない、内面的な言語直感なども研究に取り入れました。そのため、例えば構文研究だけでなく意味の研究も大幅に進展しました。

その研究方法の背景には、表面的に見えている多様な現象よりも、その背後にある抽象的な法則の方に真実性があるという**ガリレオ・スタイル**（Galilean Style）があります²⁷。チョムスキーは、発話等によって直接観察が可能な**外在化した言語**（Externalized Language, E言語）ではなく、その背後にある、脳や心に**内在化した言語**（Internalized Language, I言語）を研究対象とし、その解明を言語研究の目標に掲げたのです。

具体的には、言語学が扱うべき問題として次の3つをチョムスキーは挙げています²⁸。

- (7) a. 言語の知識はどのようになっているのか。（デカルトの問題）
- b. 言語の知識はどのように獲得されるのか。（プラトンの問題）
- c. 言語の知識はどのように使われるのか。（フンボルトの問題）

(7a)の問いは、(成人の)母語話者の言語能力の解明のことです。言い換えると、様々な言語現象を説明する規則や原理の解明です。(7b)の問いは、子どもの言語習得のメカニズム²⁹の解明のことです。最後に、(7c)の問いは、言語使用の仕組みの解明です。

この20年で急速に解明が進んでいる課題が「ダーウィンの問題」です。

26 Chomsky (1979: 131) によると、1953年に大西洋を航海中、船酔いになっていたときに閃いたそうです。

27 Chomsky (1980: 8-10; 2021: 2) を参照のこと。

28 Chomsky (1986a: 3) を参照のこと。

29 これは**言語習得能力** (language faculty) とも呼ばれます。

約10万年前にアフリカを出て世界各地へ移動した人類ですが、その時点で既に言語能力を備えていたと考えられます。だからこそ、世界に分散した人類の言語は驚くほど似ており、共通点が多いのです。近年、この言語進化の解明に期待が寄せられています³⁰。

1957年に著書『統語構造』(*Syntactic Structures*)でチョムスキーが提案した生成文法の理論は³¹、初期理論、標準理論、拡大理論を経て最近のミニマリスト・プログラム (Minimalist Program)³²へと変遷を辿っています。ただ、その根幹は揺るぎなく受け継がれています。

1.4.6 日本における英語学研究の幕開け

現在の日本における英語学研究（および、言語学研究）の水準は高く、国内外で活躍する研究者が多数います。その研究の歴史を振り返ると、今日に至る英語学研究の幕開けとなったのは、1906年（明治39年）のジョン・ローレンス (John Lawrence, 1850–1916) の東京帝国大学文科大学（現在の東京大学文学部）への赴任でした³³。

イギリス、デボン州 (Devon) のSampford Peverell生まれのローレンスは、小学校教師として勤めていましたが、大学へ進学し、1878年にロンドン大学で修士号を取得します。その後、パリやベルリンに留学し、1891年から1894年までチェコのプラハ大学で教えました。その間の1892年にロンドン大学から文学博士号を取得するのですが、さらにオックス

30 池内 (2010) を参照のこと。

31 このときチョムスキーは28歳。マサチューセッツ工科大学 (MIT) でドイツ語やフランス語などを教えていました。1957年2月に『統語構造』を出版したのは、オランダ、ハーグの小さな出版社ムートン (Mouton) です。その後、ロバート・リーズ (Robert B. Lees) による『統語構造』の書評が、アメリカ言語学会誌 *Language* (第30巻, 7–9月号) に掲載されてからアメリカ国内で注目を浴びることになりました。Chomsky (1979: 133–134) と Pullum (2011) を参照のこと。ちなみに、日本の言語学専門の出版社「ひつじ書房」の社名は、Mouton (羊) に由来します。巻末のURLを参照のこと。

32 極小主義 (Minimalism) とも呼ばれます。

33 『毎日新聞』(英語版; 2020年10月17日) に掲載されたDamian Flanagan氏の記事によると、このときローレンスは55歳。日本語は全く話せませんでした。ちなみに、夏目漱石 (1867–1916) の『三四郎』は1907年 (明治40年) の設定ですが、「人品のいい御爺さんの西洋人」と表現されるのがローレンスだと思われます。芥川龍之介 (1913年入学) の短編「あの頃の自分の事」でも、「ロオレンス先生」として登場します。